

第 8 章 : Hot Willer ~ 1 年間の結果 ~

●黒田

それからのオレは自分でも変わったと思う。
すべての見え方が変わってきた。

当たり前なことだけど、テレアポはちゃんと 200 件コールできるまでかけるようになった。
それ以上にはなかなかできないのだけど。

木下さんの時間をあまり使わせないように、自分で調べられることは自分で調べるようになった。木下さんも自分の仕事を持ちながらオレ達の指導をしてくれているんだから、少しでも負担を減らさなければと思うようになった。

オレが成長して 1 人で成約出来るようになるのが本当の恩返しだと思うけど、それはもう少し先になりそうだ。お客さまに関わる部分はしばらく木下さんにもチェックしてもらってからにしようと思う。その方がお客さまにとっても、会社にとっても、オレ自身にとってもいいことだと思うから。

明智の努力も素直に見習えるようになった。初めはバカにしていたけど、やっぱり努力しなければ成長出来るわけがない。オレはまだ新人だ。先輩方に追いつくためには、精一杯の努力をしなければならぬ。そう思えるようになった。

自信は一度完全に砕かれたけど、それは虚栄だとも分かったのだから良かったと思う。薄々自分では分かっていたことだけど、はっきりさせることができて良かった。そのおかげで本物の自信の種を見つけることができたと思う。この種はもっともっと成長しないと花は咲かないけど、たぶん本物だと思う。

●木下

「お疲れさま」とひと足先に会社を出ると、外はまだ真昼のように明るかった。真夏の太陽は 18 時を過ぎても疲れる気配もなく元気だ。

駅までの道を歩きながら、この半年間を振り返った。

教育係に任命されて驚いたのが2月。何とか初期研修をやりきったのが4月。
でも本当の試練はその後のOJTだった。

黒田には何度も悩まされたけど、おかげでボクも少しは自信がついた。
初めは教育係を担当するのが怖くて仕方なかったけど、今はやってよかったと思える。
もちろん、まだまだこれから大変なことがあるとは思いますが。

久々に同期の顔を思い出した。
もし、今のボクが当時に戻れたらどうするだろうか。彼らが辞めようかと悩んでいる時に
アドバイスできるとしたらどうするだろうか。そう想像した。

2週間で辞めた彼らは、初期研修が無いことが問題だった。今年のような初期研修ができて
いれば、彼らが短期間で辞めることはなかったのではないかな。

企画職を熱望していた彼は、欲張りだったと思う。会社は遊びじゃない。自分が仕事を選
ぶのではなくて、仕事から選ばれるようにならなくてはならない。その仕事を期待される
人材になれば、おのずと仕事がめぐってくるはずだ。それを教えてあげたい。

恋人と会えずに辞めて行った彼女はどうかだろう。
確かに、今年だって自由に休めるような会社ではない。でも、考え方を変えればきつとこ
の環境でも充実した生活が送れたのではないかなと思う。どの会社・仕事に就いたって、自
分の思うように時間が使えることなんてそうはない。自分の気持ちの持ち方が大切だと思
う。

もう少し早くこういうことに気づいていれば、彼らは今も元気に織田リフォームで働いて
いたのかもしれない。そう考えると、少し申し訳ない気持ちになった。

この想いはこれからは活かすしかない。そうとも思った。
これから同じような悩みを持つ社員も出てくるだろう。そんな時にはきつといいアドバイ
スがしてやれる。そうも思えた。

何より大きかったのは、ボク自身の未熟さに気づけたことだ。
メンバーを知ろうとしていない、人に言っていることをできていない自分自身にだ。

それに強烈に気づかせてくれたアッシュの平川さん。そして、その研修を手配してくれた

織田社長。感謝は言葉だけでは表しきれない。いや、言葉で表しても喜んでくれないだろう。

これからのボクの活動で応えていくのが、皆の期待していることだと思う。
これからもたくさんの壁にあたると思うけど、一つ一つ受け止めて、乗り越えて行こうと思う。

=====

●黒田

社長室を出て席に戻ったけど、しばらく仕事が手に付かなかった。
春はすぐそこに近づいていた。そろそろ入社して1年になる。

「黒田、ちょっといいか」と織田社長に初めて呼ばれた。

「まあそこに座れ」と促され社長の正面に座ると、更に緊張が高まった。つり上がった太いまゆ毛の下から覗く鋭い目つきと夏目漱石ばりの口髭から繰り出される威圧感の本物だった。

それを目の前にすると、オレの心臓がバクバクと動いているのが耳元まで伝わる。

「黒田」

「はいっ！」

「今年はお前に任せようと思うんだ」

「へえっ!？」

「今年はな、お前に任せようと思ってるんだよ、やれるか？」

「な、なにをですか…？」

「4月に入社してくる新人の教育だよ！」

「えっ!!」

突然のことでびっくりした。

「む、無理ですよ～社長、ボクのほかにも5人いるじゃないですか」

「お前が目標にしているのは誰だったかな？」

「はい、木下さんです」

「…だよな？」

織田社長はニッと笑った。

「あいつも去年の今頃、お前と同じ反応をしてたよ」

木下さんと同じ。オレはゴクッとつばを飲み込んだ。

オレは教育係を引き受けた。断る選択肢は与えられていなかったけれど。

木下さんに報告すると、「がんばってね」と肩と叩かれ、1冊の本をもらった。

それはくたくたに読み込まれて、ふせんやら折り目やらマーカーがいっぱい記されてあった。

家に帰り本をじっくりと読むと、「黒田にどうする？」とか「黒田に」というメモ書きがいくつも書かれていた。そこにはオレがこの1年で経験したのと同じような状況が書かれていて、一人で恥ずかしくなった。

=====

●木下

道にはマフラーを外して手に持って歩く人が何人もいる。

あれから1年が経ったということだ。

ようやくボクの教育係の任務は完了した。

何度も壁には悩まされたけど、去年の新入社員はだれも辞めてない。

定着率100%の目標は、達成できたことになる。

1年間、たびたびアドバイスしてくれたアッシュの平川さんにお礼にいくと、「やっぱりホットウィラーと仕事するのは楽しい」と言われた。ホットウィラーとは、ボクのような人のことらしい。Hot Will (=情熱ほとばしる志)を持って前向きに進む人。平川さんにそう認めもらえるのはもったいない気もしたけど、やっぱり嬉しかった。

黒田への引き継ぎを終え、社長に挨拶に行った。

「1年間お疲れさま、ありがとうな」と社長に言われると胸がじんとした。

「はい、ボクの方こそ、ボクを選んでくださりありがとうございました」

「どうだった？」

「はい、すごく濃くていい経験をさせていただきました」

「そうか」社長はひと呼吸おいて聞いた。「木下がこの1年で得たものはなんだ？」

ボクは少しだけ考えてから答えた。

「ボクが得たものは、リーダーとしての心構えと7つのHです」

「そうか、うん」

「あと…」ボクは大切なものを最後にとっておいたように付け足した。

「ん？」

「社長の想いが少しは分かった気がします」

社長の表情が少し緩んだように見えた。

ビルの外へ出ると、ボクの顔をやわらかな風が包んだ。

春はもうすぐそこまで迫っている。